# 茨城百景

Mt.Tatsuware

# 竪破山 森林浴の道

### ①不動石（ふどういし）
（横８ｍ× 縦３ｍ× 高さ１．５ｍ）
　盤上に不動明王の石像が祀られ、その足元をきれいな清水が流れ落ちています。この石像は、明治になってから祀られたもので、石そのものはもともと黒前神社の祭神が浜降りの時、神輿の休み場所であったと言われています。

### ②烏帽子石（えぼしいし）
（横７ｍ× 厚さ１．５ｍ、上部斜面の縦３ｍ）
　八幡太郎義家が竪破山の神霊に参拝した時、かぶっていた烏帽子に似ていたことから名がつきました。

### ③手形石（てがたいし）
（横０．９ｍ×縦１．４ｍ×高さ１．５ｍ）
　石いっぱいに右手の５本の指の跡が深くえぐられているように見えます。八幡太郎源義家が石を押した時についた手形と言われています。

### ④畳石（たたみいし）
（横８ｍ× 厚さ２．５ｍ）
　畳を積み重ねたように大きな石が４段に裂けるように割れています。八幡太郎義家が腰を下ろして休んだので「腰かけ畳石」と呼ばれたことに由来しています。

### ⑤仁王門
　門前には右大臣・左大臣の木像が配置されており、門の呼び名である仁王様は、後方にある畳半畳ほどの板張りの囲いの中に収蔵され僅かに格子窓を透かして見ることができます。普通の仁王様は総じて朱色ですが、この仁王様は眼のふちだけ僅かに赤みを残して、あとは御影石の地肌のままの姿でたっています。以前は、仏教像である仁王様が堂々と配置されていましたが、慶応４年（１８６８年）に発布された「神仏分離令」によって黒前神社として継承され、神社形態の随身門として右大臣・左大臣に置き換えられました。本来は処分されるべき石像の仁王様を隠しながらも大切に守ってきた背景には、仏教霊場として佐竹時代に広く恩恵を受けた地元の強い信仰がうかがえます。現在に残す神仏混淆の珍しい門となりました。

### ⑥甲石（かぶといし）
（高さ３．５ｍ、外周１２ｍ）
　元禄（１６８８年）以前は「竪破和光石」と呼ばれ、薬師如来が隠されている石として信仰され、正面に石をくりぬいた祠があり、その中に薬師如来の１２神将像が祀られています。水戸光圀翁が仏教色の強い「竪破和光石」を「甲石」に改名したと言われています。

### ⑦舟石（ふないし）
（長さ４ｍ、幅１．５ｍ、厚さ右５０ｃｍ･左９０ｃｍ）
　甲石の前にあり、土に半分埋まっているような舟型の石でその形が珍しいとされています。

### ⑧胎内石（たいないいし）
　黒坂命が陸奥（蝦夷）遠征の帰路、山の麓で疲れていた体を休めていた時、一人の童子が馬を引いて通りかかり、あまりに疲労した黒坂命を見て、その馬の背に乗せ、急坂の山肌を一気に駆け上がり、この岩窟に休ませたことから「胎内」という名がついたと言われています。

### ⑨太刀割石（たちわりいし）
（縦直径７ｍ× 横直径６ｍ× 高さ２．５ｍ）
　寛治元年（１０８７年）、八幡太郎源義家が、奥州征伐の折、戦勝祈願のために竪破山に立ち寄り、巨石の前で陣を引いて野宿していると、夢の中に「黒坂命」が現れ大太刀を差し出しました。目覚めた義家が自分の前におかれた大太刀を一振りすると、巨石が真っ二つに割れたといわれています。元禄３年（１６９０年）に隠居した水戸光圀翁が元禄６年（１６９３年）にこの山に登った折、「最も奇なり」と感銘し石の名をつけたと言われています。以前は「磐座（いわくら）」と言って、神の宿る石として信仰され、石の回りにしめ縄を張りめぐらし、みだりに石の上に上ることはできませんでした。

### ⑩神楽石（かぐらいし）
「竪破山絵図」（元禄４年）では「まいまい石」と言われ、竪破山の神霊が浜降りの際、折橋の氏子にこの場所で神輿を渡し、一休みのためにお神楽を奏し神楽舞をしたとされ、石の名になりました。

花園花貫県立自然公園保護管理協議会・日立市